

内山 節『自由論』（岩波書店、一九九八年）

「樹の自由」を考えながら

大きく育った大木を見ると、私は動くことのできない生きものの生き方とは何だろうか、考えることがある。私たちは、自身が移動できることを前提にして自由を考えている。ところが木は、種がそこで芽を出してしまえば、生涯そこから移動することはできない。それを不自由だといってしまったら、木の「人生」は成り立たないのである。

ところが木は、動けないからこそ、ひとつの能力を身につけたような気がする。それは自分が必要としているものを呼び寄せるという能力である。

秋に落とす大量の落葉は、微生物や小動物を呼び寄せ、そのことによって彼らに肥料をつくってもらっている。木がもつ保水能力も何かを呼び寄せるためのものかもしれない。ときにたくさんの花をつけて虫たちを呼び寄せ、たわわに実をみのらせて、鳥や山の動物たちを呼び寄せる。そうやって他者の力を借りながら、木は生きていくように感じるのである。

そうでなければ、そのほとんどが何百年も、あるいは千年以上も生きつづける木が、毎年あれほど多くの実をつける必要性は理解できない。もしも子孫を残すただけだったら、毎年一粒の実をつけ、その1%が芽を伸ばすことができるだけでも、大抵の木は数本の子孫を残すことが可能なはずなのだから。

ところが木々は、毎年山のような花をつけ、山のような実を落とす。なぜなのだろうか。もしもそれが他者を呼び寄せるためのものだとなれば、私は何となく納得ができるのである。

そして、もしそれがそうであるとすると、木が自由に生きるためには、他の自然の生きものたちも自由に生きていられる環境が必要である、ということになるだろう。木は自分の自由のために、他者の自由を必要とするのである。

それは素晴らしいことである。人間はときに自己の自由を手にするために、他者の自由を犠牲にさえるのに、木は他者の自由があつてこそ自分自身も自由でいられるのである。

自由を、日本の昔からの言葉のつかい方に従って、自在であることと言ひ直せば、木が自在な一生を生きるためには、自在に他者を呼び寄せ、自在に他者とともに生きていく世界が必要なはずである。こんなふうになると、自由はさまざまである。移動できないものの自由も、ここにはある。